

技術の目的

I 目的と手段

- 技術には目的が内在する。ex. 医術（患者の健康を目的とする技術）。→①
技術は目的実現のための〈手段〉→〈目的－手段〉の専門化。→②
- 産業技術の特徴
技術は、目的実現のための〈手段〉から離れて、〈技術開発→新たな欲望の触発→新しい技術…〉という無限のサイクルを歩みだす。→〈欲望〉の無限増殖＝〈欲望の論理〉
- 現代のハイテク
〈目的－手段〉関係から逸脱した技術の自己目的化＝〈戯れ〉。
技術の自己目的化を制御する文化（思想）は考えられるか？

II 技術としての〈道〉

- 医術における二重の目的
(1) 技術が適用される対象（患者）の利益。
(2) 技術を行使する主体（医者）の「徳」の向上。→仁術としての〈医道〉
二つの目的が相乗的にはたらくことによって、技術が〈道〉となる。
- 武道の場合——技術の修練をつうじて、1) 武力（武技）の向上、2) 人格の錬磨、という二つの目的が同時に追求される点に、武道の意義が際立つ。→③
あらゆる〈道〉に、二つの目的が内在する。武道に属さないスポーツ（体育）が、競技者の人間性向上に寄与するのは、技術的鍛錬に〈修業〉に通じる求道的性格——目的(2)——が含まれるからである。→④

◎テクノロジーに対して——

自己目的化した技術が独断専行する状況の中で、〈誰のため、何のための技術か？〉を問うことのできる地点が、〈道〉に約束されている。
〈道〉には、〈欲望〉の無限増殖を抑止する〈禁欲〉の仕組みが組み込まれている。
技術の原点である目的内在型の〈道〉に立ち返るべし。

【資料】

① 医者の仕事

「だからまた、およそどんな医者でも、彼が医者であるかぎりにおいては、医者利益になることを考えてそれを命じるのではなく、病人の利益になる事柄を考えて命令するのではないかね？なぜなら、すでに同意されたところによれば、厳密な意味での医者というものは、金儲けを仕事にする者ではなくて、身体を支配する者のことなのだから。——どうだね、そういうことが同意されたのではないか？」（プラトン『国家』（上）藤沢令夫訳、「第一巻」342D、岩波文庫）。

② 専門化の要請

「…以上のことから考えると、それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った一つのことを、正しい時機に、他のさまざまなことから解放されて行う場合にこそ、より多く、より立派に、より容易になされるということになる」（同「第二巻」370C）。

③ 「武道」の定義

「武道は、武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、人間形成の道であり、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道の総称を言う」（日本武道協議会が2014年、公式に制定した「武道」の定義。Cf. https://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyoku/kankeidantai_01）。

④ 〈道〉の普遍的意義

『弓と禅』は、日本の武道の修練が外国人にもそのまま通じるのであり、道を極めようとするところに、ヘリゲルが言うように「今まで思いもしなかった人間の実存のあり様」をもたらすものであることを、実証していると言えるのではないか」（魚住孝至『道を極める—日本人の心の歴史』放送大学教育振興会、2016年、268-9頁）。

【概要】

前回の「哲学講話」（テーマは「道の思想」）「哲学対話」（テーマは「生成 AI」）を承けて、技術が〈目的〉と結びつくものであること、現代のハイテクは技術の根本を忘却していること、〈道〉は二つの目的を内包する一種の技術であること、この三点を明らかにする。

I 目的と手段

『国家』第一巻は、「正義とは何か」をめぐって、正義が「強者の利益」だと主張する相手に向かって、その誤りを「技術」の観点から指摘する。あらゆる技術は、それに固有の「～のため」という目的を内包する。国家を統治する支配者の技術は、「強者」（支配者）のためではなく、「支配される人々のため」にある、という理の当然を認めさせる対話。例に引かれる医者技術は、「病人の利益のため」であって、「報酬を得るため」ではない。→①

『国家』は、正義論であると同時に技術論でもある。技術は、その仕事に最も適した専門職によって担われることで、正義にかなった理想国家の像が描き出される。→②

目的達成の〈手段〉である技術。〈目的—手段〉の統一という古典的な技術のあり方が崩れるのは、近代社会の産業技術によって。テクノロジーは、当面の必要を超えて、より多くの成果を生み出す方向に自己展開する。その恩恵を享受する社会は、より多くの利益を求め、さらなる技術開発に乗り出す。かくして、必要を超えた成果を求める〈欲望〉が点火され、〈欲望→技術→欲望…〉のサイクルは、無限に拡張してゆく。その行き着いた果てが、現代のハイテクの世界。ここでは、技術の領域が、統御する主体の手から離れ、それ自体の論理で自己展開するため、一般市民はカヤの外に置かれる。とりわけ生成 AI は、「誰のため、何のため」を問うことのできない仕方で、新機軸の所産を次々にもたらし、それを受け入れるよう人々に強いる。それを拒否することが困難な「テクノ・ファシズム」の支配。

他者化、異物化した技術としての生成 AI——Alien Intelligence（異星人の知性）という、マルクス・ガブリエルの洒落（『日経』ネット・ニュース、2023.7.23「テクノ新世」）が、これまでに接した識者の発言として、唯一まともなコメント。これにどう対抗するかを、「哲学者」ではないふつうの人の理性で考えなければならない。

II 技術としての〈道〉

〈道〉は、技術の一種である。このことに思い至って展望が拓かれた。プラトンの考えた技術は、対象の利益を目的とするが、それ以外の目的にふれていない。医者目的のうち、患者の利益以外に、自分自身の〈人間性の向上〉がある。後者をめざすとき、医術は「医道」となる。それがより明らかなのは、武道のような〈道の文化〉。あらゆる〈道〉の本質は、それを歩む者の人格、人間性（徳）を磨き、向上させること。「武道」の定義（→③）は、それを示すものの、武道とスポーツとの違いや共通性に言及されていない。武道とスポーツの〈あいだ〉を開かなければならない。この点に関して、不世出の弓道家阿波研造と出会ったドイツ人哲学者オイゲン・ヘリゲルの証言（『弓と禅』『日本の弓術』）がある。→④